



直方南小学校だより

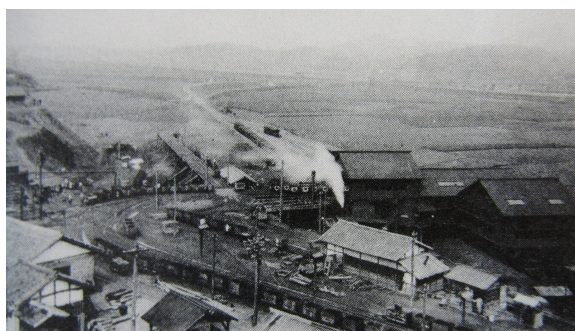
令和7年6月12日(木)

直方市立直方南小学校

No.8 校長 塩田 朋久

直方南小学校のあゆみ② ～石炭・鉄工産業とともに～

江戸時代が終わり、日本は一気に文明開化の波が訪れました。「富国強兵」をテーマに、世界と肩を並べるために教育や産業が次々と改革されていきます。明治時代～昭和30年代



は産業の中心が石炭産業で、ご存じのようにここ筑豊地区は国内有数の炭田を誇り、県内外から就労者とその家族が集まりました。直方も石炭産業が栄えて、児童数も増えていきました。本校の場合、1910年(明治43年)、児童数は、**なんと、2038人!**あまりにも急増したので通常の授業ができず、二部制(午前と午後で児童が交代する)でしのいでいたのです。そして、当時の「直方町」は大慌てで仮校舎の土地を買ったり、保護者からお金を集めたり、地域から寄付金を集めたりして、新たな校舎建設へと向かっていったのです。今では考えられない児童数ですね(1クラス65人程度の31学級・・・)。



明治43年ごろの「直方駅」



大正初めごろの初代「日の出橋」

男女で学校を分立・・・！？

1912年(大正元年)12月10日、本校に二人の校長先生が就任しました。なんと、学校を分立させたのです。一つは「**直方男子尋常校**」、もう一つは「**直方女子尋常校**」と男女で分けたのです。1915年(大正3年)4月に、「直方南尋常小学校」と改称し、現在の場所に移転するまでのおよそ2年4か月は分立していたことになります。

当時の町会議案には「本町尋常小学校生徒男女ノ二校二分立セントス」(M42年3.26)と記されています。理由は、「南小は校舎の新築を計画し、近々建築に入るようになった。残りの増築が終わる時は、法令により男女を分け、二つの小学校として教育の完全をねらう」(現代の言葉にしています)。しかし・・・この文を見ても明確な理由がよく分かりません。当時の就学児童の急増や、校舎の不足、教育方針などいろいろな背景があったのでしょう。ひとつ言えることは、膨れ上がった南小のために、町はもちろん、保護者や地域から多額の寄付金などで学校が建築されていったということ。多くの人たちの支えは、再び1校におさめることで結実したと言えます。

(つづく)